

人生の節目と「あるべき姿」

うえ ひろ えい じ
上 廣 榮 治

人生には、いくつか大きな節目があるようです。節目の時期や数は人によってさまざまでしょうが、その節目の一つ一つを正しく乗り越えることができれば、次のステージは充実した仕合わせなものになるに違いありません。

反対に、節目に至ったことに無自覚であったり、節目であることに気づきながらも自分を変えることを怠ると、その後の人生に無理が生じて、しばしば破綻をきたしたりいたします。

例えば、人はいつまでも子どもでいることは許されません。父母の慈愛に守られて、自分の心をとらえた思いだけを心おきなく追っていけばいい時代と、いつかは訣別しなければなりません。

学校でいえば、小学校から中学校へ上がるときに、子どもでいることができなくなる節目の一つでしょう。日がな一日遊ぶことで心と体を鍛えていた時期は終わり、大人になるための基礎学力や思考力、社会の常識などを身に付ける最初の段階に踏み込んだのです。

また、学業を終えて社会人になったとき、結婚して家庭を築いたとき、子の親になったとき、仕事などで役職についたとき、子どもが成人して親の庇護を離れたとき、引退して新たな人生を歩むとき……、それら

のすべてが人生の節目になります。

もしも、それらの節目で、新たな段階に踏み込んだという自覚を欠いたとしたら、どのようなことになるのでしょうか。残念なことに、そんな悪しき例ならいくらもあります。

例えば、社会人としての自覚と資格に欠ける人々は枚挙に暇がありません。選挙で選ばれた選良のなかにも、社会に奉仕すべき公務員にも、子どもの人格を陶冶するはずの教師のなかにも、大人気ない事件を起こす、「大人になりきれない」人たちが後を絶ちません。また、親離れできない子や、子離れできない親もたくさんいます。

今年に入ってから、家庭内での殺人事件が相次いで報道されました。そのすべてが、夫であり妻であり、あるいは親であり子である自覚と努力に欠けた人たちが引き起こした事件でした。彼らはみな、人生の節目を自覚することなく、悪しき子どものままに大人になってしまった人たちです。

本来、子どもは、まず家庭で父や母を手本に、人間はどのようであらねばならないのかという教養を身に付けます。男はいかに振る舞うべきか、女はどうか、親とはどんなものか、子どもはどうあるべきなのかなど、まことにたくさんさんの教養を学んでいくはずですが、学校に進んでからも同じです。児童生徒のあり方を、善き教師、善き友から学び、自分の姿を止していかなければならないはずですが。

しかし、立派な大企業や官庁や学校などでの不祥事が明らかにするたびに、組織の現場だけでなく、現場を指揮する幹部にも、自らの職責や人としてのあるべき姿を自覚できない人たちが大勢いることを見せつけられて、慄然とすることがしばしばです。彼らもまた、幼いころから今に至るまで、わが身を正す教養を身に付けてこなかった人たちなのでしょう。

どうやら、ここ数十年にわたって、この社会はそれぞれの節目ごとの「あるべき姿」ということを意識さ

せることなく、子どもや若者たちを育ててきてしまったのではないかと、思えてなりません。

それはいつからなのでしょうか。おそらく敗戦のときからだと思います。それまで学校で、まがりなりにも人生の節目節目のあるべき姿を教えてきた修身がGHQの指令で廃止されました。たしかに戦前の修身は軍国主義的で、国のために私を滅するという非人間的な偏ったものではありました。しかし、国の世論をリードしていた人々は、こうしたGHQの指令に過剰反応して、それまで築かれてきた、あらゆる伝統や社会生活の規範を全否定してしまつたのです。

全否定しながら、子どもはどうあるべきか、学生は、社会人は、夫は、妻はかくあるべきだという新しい目標が何も示されなかつたために、人々は個人の「自由」と「権利」と「平等」という空念仏のもとに、眼前の利益を得ることや、利那的な享樂に身を任せることに狂奔しはじめたのです。

敗戦の翌年、わが実践倫理宏正会は、行なえば必ず仕合わせな人生を実現できる生活の基本を掲げて登場しました。過去の悪しき道徳を超越しながらも善き伝統は継承していく、まつたく新しい人生の手本を世に問うたのです。それは倫理社会を創建するという壮大な試みでもありました。しかし残念なことに、その教えに接することができた人々は、まだほんの少数にすぎませんでした。

大方の人々は聞きかじりのアメリカ流を無反省に信奉したり、目先の欲望の充足を最優先していました。そして、その子どもたちは大人の試行錯誤に敏感に反応して、何事であれ「自分の思うまま」であることが善いことだと錯覚するようになりました。

大人だって、自分たち子どもが見習うに足る存在ではない。自分たちと同じように、確固たる人間像をもたず、自分の欲望の充足に右往左往する未熟な存在だと、見くびってしまったのです。大人が子どもの手本でなくなつたら、もう、子どもは大人の言うことを聞こうとしません。大人も子どもと対等であり、「平等」

なのです。

しかし、人はかくあるべきだと尊敬できる手本をもたない子どもや若者は不幸です。どのようになりたい、何をしたいという志をもつことが難しいからです。彼らにとって「したいこと」とは、ただ、自分の興味と欲望のおもむくままにすることではありません。そこには善悪の基準も、未来への希望もないのです。その結果、致命的な失敗を犯すことにもなるのです。

そんな「あるべき姿」を意識することの薄い戦後生まれの世代も、もう六十歳を超えたのです。近年の犯罪や家庭内の暴力事件に、しばしば高齢者が関わっているのも当然なのかもしれません。

そうした彼らは、おそらく社会人になった、大人になった、高齢者になったという自覚なしに、ただ刹那的な欲望に突き動かされ続けて、今の年齢に達してしまった人たちなのでしょう。

問題を起こさないまでも、ただ欲望のままに生きている人たちもたくさんいます。彼らが「あるべき姿」を自覚する日がくるのでしょうか。それは大変難しいことでしょう。しかし絶望することはありません。人生の節目節目を「あるべき姿で生きる」仕合わせを放射する会友たちが周りにいれば、彼らの内に、同じように仕合わせになりたいという思いを抱かせることができるかもしれないからです。

さて、あなたは今のステージの「あるべき姿」をどのように自覚しておられますか。

